

ミニデイ【おとこの台所 桜新町だより】

発行責任者 桜新町広報：柏木君夫、岡元正史

◎ 渡部 真典 様が、入会されました。



◎ 都市「江戸」の建設。

初代将軍家康、二代秀忠、三代家光の三将軍が統治した50余年の間に、江戸の町の急激な拡大と人口の増加のため、行政機関としての江戸城も繰り返し拡張されて、武家町、寺社町、町人地など城下も整備されていく。江戸城の天守も50余年の間に、三回建て直された。

◎ 明暦の大火と、江戸城の焼失。

四代将軍家綱の治世。明暦3（1657）年1月18日から20日におこった未曾有の大火で、別称「振袖火事」と呼ばれた。江戸は、幕府が開かれてから54回目の正月を迎えていた。江戸はほとんど雨が降らず、乾燥した日々が続いていた。

18日の天候は晴れで、乾（北西）の方より風が吹き出ししきりに大風となった。羊刻（ひつじのこく。午後2時）、本郷・本妙寺で火の手が上がる。火は神田から、日本橋、深川、霊岸島、八丁堀、木挽町（銀座）まで延焼する。

翌19日午上刻（うまのじょうこく。午前11時）、再び小石川から火が上がる。大名屋敷を焼き尽くしながら、ついには江戸城に迫った。最初に燃え移ったのは、天守である。開いていた窓から火の粉が飛び込み、天守が炎上し、焼け落ちた。その後、火炎は本丸御殿、二の丸へと燃え広がっていった。

同日19日申下刻（さるのげこく。午後4時）、麴町から出火。炎は外桜田、芝を焼き尽くす。

全ての火事が治まったのは、翌20日の朝であった。

焼失地は、江戸の六割以上。死者は（正確な江戸の人口と被災者の記録はないが）推定で7万人から10万人とされる。

江戸時代のおよそ260年の間に、江戸で49回、京都で10回、大坂で6回の大火が起こっている。江戸は新興都市で防災が脆弱であった。一方、商人の町の大坂では、商家は商いと財産を自らで守る意識が強かった。

明暦の大火ののち、江戸城本丸は再建される

ことはなかった。皇居東御苑には、徳川幕府が加賀藩に命じて造らせた天守台の石垣だけが、今も残っている。



1月の定例会 参加者は、5日（木）は9名、13日（金）は17名でした。

2月の定例会 2日（木）、10日（金）です。